

[2]

氏名	彭妍秦 ^{べん えんちえん}
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 239 号
学位授与の日付	平成 28 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	坂口禰子文学研究
論文審査委員	主査教授 増田 周 子 副査教授 関 肇 副査教授 山本 卓

論文内容の要旨

本論文は、坂口禰子文学について、論じたものである。論文の構成は以下のとおりである。

序論

- 一、終戦までの「台湾文学」の流れ
- 二、坂口禰子の先行研究と現状
- 三、研究目的と論文の構成

第一章 坂口禰子の生い立ち

- 第一節 出生と環境
- 第二節 文学への揺籃期
- 第三節 板橋源との出会い
- 第四節 最初の台湾滞在
- 第五節 結婚と再度の台湾生活
- 第六節 戦後の活躍

小結

第二章 坂口禰子と台湾

- 第一節 坂口禰子と『台湾文学』
- 第二節 坂口禰子の異文化描写——一九四〇年代初期の作品から見る

小結

第三章 戦争下の坂口禰子

- 第一節 坂口禰子と戦争——「灯」を通して——
- 第二節 「蕃地」論
- 第三節 「蕃婦ロポウの話」論

小結

第四章 戦後の創作

第一節 「蠶螂の歌」論

第二節 「風葬」論

小結

終章

付録(一) 坂口禰子の略年譜

付録(二) 坂口禰子の作品目録

参考文献

(論文概要)

本論文は、「序論」「第一章 坂口禰子の生い立ち」「第二章 坂口禰子と台湾」「第三章 戦争下の坂口禰子」「第四章 戦後の創作」「終章」の構成になっている。

「序論」では、日本が台湾治下のもとで、台湾の文学活動や作品が変化し次第に特殊な「台湾文学」を生み出した点や、近年の台湾の歴史研究の隆盛とともに、日本統治時代における文学研究がより重視されるようになった点をまとめている。台湾においては、未だ日本統治時代の日本人作家についての研究は数少ないが、「台湾文学史」を考察するなら、日本統治時代の在日日本人作家たちの文学活動や作品研究に言及しなければならないことを述べた。さらに坂口禰子が、日本統治時代の台湾文壇で活躍した日本人作家の一人であり、台湾に滞在している六年間の間に(一九四〇～一九四六年)、数多くの作品を発表したことを整理し、坂口を研究する意義を提示している。また、坂口禰子の先行研究を全てあげ、先行論文で考察されたことを指摘し、未だ研究されていない点について論じた。

「第一章」は、「六節」に分けて、坂口禰子の文学活動の出発から、戦後日本に引き上げてからの創作活動などについての伝記を詳細に研究している。特に、支配された弱者をみる坂口作品の眼差しに幼少期からの母からの影響が見られることや、板橋源との出会いと失恋が台湾に渡り、台湾文学を書き綴った要因になったことなどを指摘している。また、坂口貴敏との結婚や、楊達との出会いが、坂口の文学活動にいかにか大きかったかなどを述べた。

「第二章」では、坂口禰子と台湾について「第一節 坂口禰子と『台湾文学』」「第二節 坂口禰子の異文化描写——一九四〇年代初期の作品から見る」の二節に分けて、詳細に論究した。一九四〇年から、坂口禰子は台湾に渡り、新しい生活を体験し、新たな創作意識を持って小説を書いていた。その頃の小説群を本章では扱っている。台湾文壇に注目された「黒土」や「春秋」「鄭一家」「杜秋泉」などをとりあげ、皇民化や同化政策、異文化の問題を本格的に論じている。日本統治時代における台湾の環境の描写や、主人公たちの設定などの分析を通して、内地人と付き合う際に現れるコンプレックスを浮き彫りにし、当時日本人である坂口禰子がどのような視線で台湾を見ているのか読み解いた。そして、この時期の坂口が、台湾人でも、日本人でも同じ人間であるという「内台の民族的無差別」を提唱しながらも、日本精神を象徴する「八紘一宇」に対しても疑問を感じていないような、日本の政策を信頼した描き方であったことを指摘し、戦前の坂口が統治者側の立場から、社会問題を観察していたことを述べた。

「第三章」では、戦争下を描写した作品「灯」と台湾原住民を描写した作品「蕃地」「蕃婦ロポウの話」を取り上げている。「灯」は、よき皇民を描いただけではなく、戦争末期の

悲しさ、辛さなども描かれ、戦時下女性の姿を赤裸々に描写している。戦時中に描かれた作品を考える場合、当時の検閲による言論弾圧事情や、軍国主義思想など戦時下の特殊事情を考慮せねばならず、国策に忠実な作品であっても実際に作者が戦争を賛美し、協力していたのかどうかは、単純には断定できないと結論付けた。「蕃地」「蕃婦ロボウの話」は、戦争のために、坂口が蕃地で疎開生活をした体験に基づいて描かれた小説であり、蕃地や霧社事件を題材に創作された。坂口は、台湾原住民達と交流し、霧社事件の現場を視察して、「台湾在来の先住民族に対する、理由のない蔑視、差別」に憤りを感じはじめた。そして最後は、人権の尊さと民族を超えてお互い尊重すべきだという考えに至ったことを、作品中の混血児の問題、理蕃政策の葛藤などの分析を通して指摘した。

「第四章」では、「蠶螂の歌」、「風葬」の二作の坂口の戦後の創作についてとりあげた。「蠶螂の歌」というタイトルの「蠶螂」はカマキリのことである。論者は、カマキリは、メスがオスを食い殺すことから、小説での多くの性愛場面は男女の究極の性愛を象徴するものだと考察した。また小説の後半での展開から、坂口禰子が表現したのは、立子が子供を産むことによって、前向きに生きることだと解釈した。つまり、論者は小説での「蠶螂」は“母は強い”というイメージを象徴していると指摘した。一人の女性が困難な現実にあっても“母”として生きることを通して、自分の弱さや血統などの悩みを乗り越え、新しい道を見つけていく姿を「蠶螂の歌」で表したと論じた。「風葬」では、主人公六助は、前世の六助である〈あいつ〉との心内対話を通して、両足の切断からくる絶望を乗り越え、自分の死は終局ではなく新たな生の旅であるという輪廻転生の死生観を信じるようになった。このことから、結局、六助は自分の運命をありのままに受け入れ、最後まで前向きに生きることになった。論者は、「風葬」は坂口禰子の「命」や「生命」への関心が、如実に反映した作品であると位置づけた。

「終章」では、「一～三」において坂口禰子作品の特質を論じている。「一、母による人格の形成」では、坂口の作品に弱い人や生活に苦しい人を主人公としたものが多くある点を指摘し、第一章「坂口禰子の生い立ち」でも言及したように、母マキからの人間は皆平等であり差別を持たないという教えの影響が濃厚であることを述べた。「二、二つの故郷」では、坂口の創作の舞台が九州と台湾にあることを述べ、九州と台湾は「故郷」と言え、創作の原点の場所と考えられると論じた。「三、台湾文学史における坂口禰子研究の意義」では、近年坂口が再評価されつつあること、これまでの戦前の作品や蕃地に関わる作品群の研究だけで不十分であると述べ、本論であつかった戦後の作品や作家活動に目を向ける必要性を論究した。

論文審査結果の要旨

本論文では、「序論」にて坂口禰子の先行の「年譜」に関しては余り精密ではなく、さらに先行研究は、戦前の作品が中心であったことを指摘し、戦後の作品を論じる必要性を示している。前提としての、研究の目的が明確に示され、それにそって明解な論旨が展開されていることは重要である。以下、章ごとの評価できる点を簡潔に示す。

「第一章」では、これまでの先行研究では、単に年代記を記しているにすぎなかった坂口の年譜や伝記事項を、坂口の最初の台湾における文学活動と言われる「白き路」という

短歌や、「母の像」という作品を読み解き、加筆修正した。従来の研究を超えた詳細な伝記研究がなされた点は、高く評価できる。

「第二章」では、皇民化や同化政策、異文化の問題をみつかった戦前の作品を精細に分析し、坂口は、戦前は、統治者側の立場から社会問題を観察していたことを指摘した。統治下の台湾での問題を浮き彫りにし、坂口の作品には、「内台の民族的無差別」を提唱しながらも、完全にその考えが反映されていないことを指摘した。戦前の微妙な支配者と被支配者の関係性を視座として作品を分析し、戦前の坂口作品についての見解をまとめた点は意義深い。

「第三章」では、戦前に描かれた「灯」と戦後の「蕃地」「蕃婦ロポウの話」について論究している。「灯」は、戦時下での銃後の女性の心理を描いた作品であるが、国策に忠実で在らねばならない女性の戦争末期の姿を、当時の戦時資料や、戦時下の検閲問題などにも触れ、緻密に分析した。戦争中の坂口作品を論じた貴重な論稿で、注目に値する。また、「蕃地」「蕃婦ロポウの話」は、坂口の蕃地疎開中の、多くの取材に基づいた貴重な作品であるが、ほとんど論究されてはこなかった。本論では、その取材状況や、モデルなどを論者独自の調査で明らかにし、混血児の問題、理蕃政策の葛藤などの作品テーマについて論じた。坂口研究において従来とりあげられてこなかった作品群を論じ、新たな知見を提示したことは画期的で、高く評価できる。

「第四章」では、「蠶螂の歌」、「風葬」の戦後の二作品をとりあげて論究した。前者は、カマキリの生態の比喩的表現、後者は、前世と現世の主人公との心内対話、いずれも一風変わった坂口の創作表現を、独自の内容分析で明らかにし、人間の生や性の問題を論究した。いずれも坂口の四十代後半以降の作品で、全く論じられてこなかった作品である。論者は、先行研究がほとんどない作品を鋭い分析で論じた。いずれも学会査読誌に掲載された論稿でもあり、作品解釈の力について十分評価できる。

「終章」では、坂口禰子作品の特質をまとめ、作家研究における新たな見解を提示した。先行研究を一步前進した論であるといえる。

以上、彭妍蓁氏が本論文において新たな知見を加えたことは高く評価できる。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。